http://decfamily.p1.bindsite.jp/2013NEW/

We 25R

No.243　03/07/19

読書しよう

夏休みである。先ごろ配布した25Rの星陵祭向け夏休みの予定表は、●●さんが５時間もかけて作成した力作である。額に入れて机の前に飾っておこう。

ちなみに、私の予定を簡単にいうと、

○第●週と第●週は夏休みをいただく。
○第●週はバスケ部の合宿引率。
○第●週と第●週は補習。２年生２講座、３年生３講座で、約300名の諸君とお勉強。
○第●週は自分のお勉強。漢文教育研究会が行う夏期講座に３日間、駿台が先生向けに行う研究セミナーに２日間参加する。駿台の方は、霜栄先生の「センター現代文問題の解き方」というセミナーで、楽しみにしている。

というわけで、一日中出校しているのは第●週・第●週。何か相談や質問、その他用事のある人は、その間に顔を出してほしい。

＊

さて、夏休みといえば読書である。ぜひ、自分の進路と関連しそうな新書を１～２冊読んでほしいところだが、最近読んで面白かったのは『（株）貧困大国アメリカ』（堤未果、岩波新書）。読みやすいし、こういう視点から社会を読み解くことができるのかと、新たな視野が開けるだろう。理系の人にもお勧めなのが、話題の『知の逆転』（NHK出版新書）。世界的な知の巨人たちが、現代という時代をどう捉えているのかが分かり勉強になる。

美術が好きな人には、『モナ・リザはなぜ名画なのか？』（西岡文彦、ちくま文庫）。あれだけもてはやされる理由が、美術史の知見を通して解説されており納得できる。写真が好きな人には『キャパの十字架』（沢木耕太郎、文藝春秋）を勧めたい。キャパを一躍世界的写真家に押し上げた名作「崩れ落ちる兵士」という写真の秘密に迫る問題作である。筆者の沢木耕太郎さんは代表的なノンフィクション作家で、スポーツを題材にした『スローカーブをもう一球』（角川文庫）、『一瞬の夏』（新潮文庫）、『敗れざる者たち』（文春文庫）などもおもしろい。

＊

さて、文学作品で私が最も勧めるのは、ガルシア・マルケス『百年の孤独』（新潮社）。文庫になっていないのが玉に瑕だが、世界最高の達成の一つである。この作品世界が持つ想像力を越える作品を私は知らない。

ただ、この作品の世界は独特で、ちょっとついていけそうもないと感じる人には、同じく想像の面白さ、つまり文学の面白さを十分に味わわせてくれる作品として、アメリカの現代作家ジョン・アーヴィングの作品を推薦したい。私が一番好きなのは『ホテル・ニューハンプシャー』（新潮文庫）で、村上春樹がこの作家から影響を受けていることがよく分かる（そして、村上春樹がこの作家の足下に及ばないのもよく分かる）。

彼の作品は映画化もされており、どれもよく出来ている。映像から入りたい人には「サイモン・バーチ」（レンタル店にあるはず）が一押し。映像とBGM、脚本がマッチして素晴らしい作品となっている。スパイダーマンのトビー・マグワィア主演の「サイダーハウス・ルール」もイイし、前述の「ホテル・ニューハンプシャー」はジョディー・フォスターとナスターシャ・キンスキー主演である。